

紙漉き屋さんを思いやり、良い楮を作るんだ

名人 齋藤 邦彦・茨城県久慈郡大子町

聞き手 遠藤 愛斗・岩手県立盛岡農業高等学校1年

■初めまして

齋藤邦彦です。昭和21年2月22日生まれ、73歳。私の兄弟は3人で、生まれも育ちも茨城県大子町だよ。家族構成は5人で妻と長男夫婦と、孫が1人で一緒に住んでるよ。仕事は和紙の原料の楮の栽培と加工、販売がおもだ。

楮の仕事は結ゆいっていう近所の農家同士の共同作業のなかで、必要な道具とか要領を覚えてたんだ。



齋藤さんと並んで

あとは「大子那須楮保存会」の会長。作ったのが平成28年の11月で名前だけに感じるけど、紙漉き屋さん（和紙職人さん）は私を頼りにしてくれるんだ。

■生い立ち

昔から大子町は、とにかく山の中だよ。周りには不便な砂利道ばかり。街に出るにしてもバスも何も走ってなかったから。

私の店は明治から続いている、今となっては店でお酒、塩、自動販売機の飲み物くらいしか売ってないけど、昔は百貨店みたいにお菓子や文房具、障子紙、下駄。ありとあらゆる商品売ってたんだ。

5、6歳のころは、小規模だけど多くの楮農家が楮を育てていたんだ。私の両親も楮農家をやっていた。このころは楮の加工とかを遊びでしかやったことがなかった。近所の楮農家が加工をするときに、お互いに手伝うために行き来してたことはあったけど、各楮農家で加工をこなしてい

た。加工した楮は問屋さんの仲買人が歩いて回って楮を買い集めていた。冬の正月とかは作物を売って生活していた、たとえば楮の加工したものとかこんにゃくを売って生活してたの。

小学校は今は廃校になったけど、家から大沢小学校っていうところに歩いて15分かけて通っていた。私の性格はま

だ静かな方で、帰り道は川で遊んでから家に帰っていた。

中学校は今は統合されたけど上小川中学校という中学校まで自転車で30分かけて通っていた。部活動はソフトテニス部に入っていたね。

高校は大子第一高校を卒業した。今の大子清流高校。通うのに1時間くらいかかったね。まず近くの上小川駅まで自転車で行って、当時は汽車に乗って常陸大子駅まで行って、それから15分から20分ぐらい歩いて高校に通っていた。部活は中学校からそのままソフトテニスが続けたよ。

将来の夢の有無の前に、私は一家の長男で、楮も含めて家の農家を継がなければならぬって考えはあったけど、本業は明治から続いているお店を営んで、副業として店の合間をぬって、畑で楮とかこんにゃくを栽培していたね。

お店を営みながら農家の仕事をしたり持っていた山の手入れをしてたけど、ここ20年、30年で店の経営も、山の仕事も上手いかなくなって、スーパードコンビニができて小さい店は人が来なくなり、集落から人がいなくなつて過疎も進んで楮農家も減ってしまったんだ。



齋藤さんの畑の一部

■大子町の楮生産の拠点になるまで

大子第一高校を卒業して5年間は土浦市にある関東つくば銀行で働いたね。

銀行を辞めた後は家業のお店が衰退していった。その後住宅の基礎を作る仕事を頼まれて、20年から30年くらいやったかな。楮農家は仕事の合間にずっと続けてたから、毎年1月から3月は住宅の基礎の仕事を楮の仕事のために休んで。畑とかの手入れは日曜とかの休みと早く帰ったときにやってたよ。

楮を多く育てたのは、昭和の55年から。他の楮農家の木を集めて加工するようになってからは40年経つかな。

楮農家で加工を辞めた人や問屋の人が買い集めた楮の加工も頼まれたから、大きく始めたの。楮農家が、高齢で楮を蒸す作業が難しくなると、私が預かったり楮の木を黒皮にする仕事をもらつてお金をもらおう仕事を引き受けたの。

岐阜県的美濃和紙のなかの本美濃紙ほんみのしと福井県の越前奉書紙えちぜんほうしょの紙漉き屋さんの方にも増やしてほしくて頼まれてるけど、今楮を育ててる人にも増やしてほしくて頼まれて、私の畑でも去年と一昨年で1500本から2000



齋藤さんの家に集められた楮

本ぐらい植えて今年は500本植えて、一町歩(約1ha)くらい楮を栽培してる。

■大子那須楮のブランド名の由来

大子那須楮は栃木県で栽培してるって思ってる人が多いの。

名前は那須楮から始まって、由来は、今みたいに車とかの交通手段がないから川に船で流したんだ。茨城の那珂川と栃木県の鬼怒川から流して、水戸に出すときは那珂川から送り、東京に出すときは鬼怒川から送ったと言われているの。

那須の近くで楮の積み出しをしたから、那須楮って呼ばれるようになって、栽培してるのは茨城県大子町だから、大子那須楮ってブランド名になったんだ。

■大胆な転換

大子那須楮保存会を立ち上げて、約3年。岐阜県的美濃和紙の技術が世界遺産になった後、多くの注文が来たけど、今まで楮が買ってもらえなかったから楮農家が畑の数を減らしてしまったから楮がないことを紙漉き屋さんが知ったとき驚いたんだ。美濃和紙の紙漉き屋さんは大量に楮があると思ってたの。問屋さんに注文すれば、美濃和紙の紙漉き屋さんは大量に買えると思ってた。だけど、楮を栽培してる楮農家は楮が安くて売れないときは捨てたときもあった。

東日本大震災のときは、何とか紙漉き屋さんに売ろうとしたけど無理矢理売ると安くされるから問屋で売る量を減らされたの。それで、私と取引していない紙漉き屋さんによつては紙を漉くための楮がなかった人もいと聞いた。問屋に依頼すると楮の流通全体の状況がわからないから、問屋を挟まないことにして、私の楮がほしいときは直接来てほしいって電話

して頼んだ。

今は直接楮を売ってるよ。その後美濃和紙の保存会の副会長がうちに来て、楮が少ないことを知って、楮を守ってほしいって要請に来たんだ。それで大子那須楮保存会を作ったのが平成28年の11月。そして、紙漉き屋さんからの依頼が多く来て、全国和紙保存会会長とか越前奉書紙漉きの人間国宝まで来るようになって、楮農家と紙漉き屋さんが交流してお互いに話し合いながら仕事ができるようになったの。そして紙漉き屋さんが楮の栽培や加工の仕方を見たことがないからって私のところに来るようになったよ。

■楮とは

楮はクワ科で、12月ごろになると全部の葉っぱが落ちる木なんだ。私や大子町を含めて育てているのは大子那須楮。和紙の原料なんだけど、楮の木の幹の皮の繊維を使うんだよ。岐阜県的美濃和紙や福井県の越前奉書紙は私の楮使ってるんだよ。美濃和紙や越前奉書紙は文化財の修復とか高級な絵とか、書物、木版画とか掛け軸とか障子紙にも使われるんだよ。私の楮は世界にも和紙として送っていて、東京オリンピックの表彰状の和紙の原料の楮は95%以上の楮を使って、美濃の紙漉き屋さんが和紙を漉いてるんだ。他にも大子那須楮は本美濃紙としてルーブル美術館とか、大英博物館にも送られて、それ以外にもフランス、イギリス、アメリカ、イタリアとか世界に行っている。

楮を栽培するには大子町の昼と夜の寒暖差と、山のなかで急斜面が多くて石がゴツゴツしてることが水はけの良さにつながって、楮の栽培には適しているんだ。楮は除草剤に弱いから、芽が出る5月ごろより前に一度だけしか使わないようにしないとイケないんだ。芽が出た後に使うと枯れてしまう。だから雑草が出てきたら、手作業で全部草を取らないといけな

い。そして5月ごろになると芽が出てきて、長い楮だと1年で4mから5mくらいまで伸びるんだ。元気で上に向かって真っすぐに伸びてる良い楮だけを畑に残しておくんだ。

■楮の栽培から手間を惜しまない

私の仕事のスケジュールは、5月から11月は手入れを含めて楮の栽培、12月から3月は加工、3月から7月は楮の検品をして依頼先の紙漉き屋さんに送って販売するんだ。

①楮の「芽かき」

1枚の畑の芽かきに3日も4日もかかる。5月から11月くらいまで幹から出てきた芽を切り落として真っすぐきれいに成長するように手入れする。これを芽かきというの。

1. 剪定鋏は残したい枝や幹に上の刃が手前になるようにして、根元から切り口を傷つけないように刃を入れて、切った後に傷跡が残らないようにする。

2. 残したい枝や幹に上の刃が手前でないと、上の刃の厚さだけ中途半端に残る。芽が出てきたら早めに切り落とさないと、硬くなって切り落とすにくくなる。切ってもすぐ



齋藤さんが芽かきをしている

芽が1週間くらいで出てくる。

※基本は出てきた芽が青いうちに手で折り、硬くなった楮は剪定鋏で切る。

②収穫

大きな太枝切り鋏で楮を根元から伐るんだ。

③幹の長さを揃える

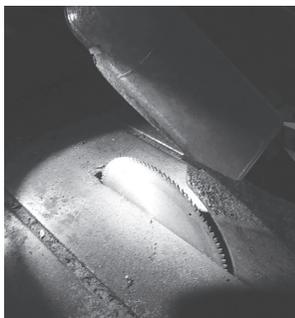
根元から伐ってきたら、丸鋸盤で尺貫法でいう2尺6寸(約77cmから78cm)に切って幹の長さを揃えるの。

昔は「押切」ってやつで切ってたんだ。重くて7人くらい人手が必要だから今は使わなくなってきた。

④楮蒸し(楮ふかし)

楮蒸しは蒸気で楮を柔らかくすること。釜8割から9割くらいに水入れて、下の方から火を燃やし、そして楮を立てて甑に入れて、だいたい1時間半蒸すんだ。私は楮を収穫した後これを1日7回、週に2日くらい釜を稼働させるんだ。

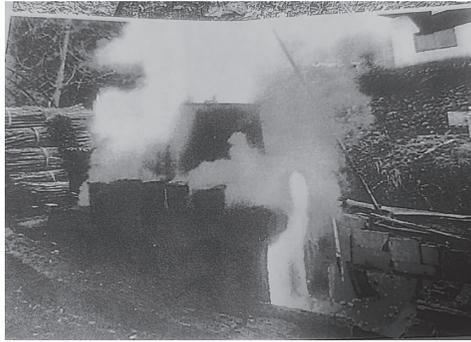
楮蒸すときに使うのに材木が置いてあるんだよ。家を壊したときに出る松とか杉の廃材を短く切って使ってるよ。



齋藤さんが楮を短く切るために使っている丸鋸盤



楮を根元から伐って収穫する様子



楮蒸しをしている様子



押切：刃に楮を乗せて柄を引き下ろす



甑を持ち上げるウィンチ



楮蒸しをするときに使う廃材



ステンレス製の甑

⑥ 水に浸して、表皮取り
 私の仕事としてはこの作業が一番手間かかるかな。上手な人でも1日
 1貫目（3・75kg）が精一杯だね、それでも早い方だ。一晩水に浸して柔
 らかくして黒い皮を剥ぎやすくする。そして、楮剥きで幹から剥がした皮
 に黒い皮や甘皮っていう緑色の皮がついてるのを小包丁こぼうちょうで剥いで白くする



蒸しあがった楮



みんなで集い、楮剥きをする様子

⑤ 楮剥き
 ウィンチがあるから甑を持ち上げたり、下したりするのがだいぶ楽に
 なったんだ。
 蒸した楮が冷めないうちに楮の幹から一本一本幹の皮を手作業で剥ぐ。
 これを楮剥きというんだ。

名人が3年前水戸市の鍛冶屋さんに特注で作ってもらった1万2000円の小包丁。刃先は4寸(121mm)ほど



小包丁で表皮取りをしている



楮を水に浸しておくための浴槽



表皮取り台を使う名人



表皮取り台



出荷前の干している楮

んだ。それを表皮取りっていうんだよ。水に浸すのは蒸した楮が硬くならないようにして、表皮を取りやすいままにするために一晩くらい浸けるけど、そうすると柔らかいまま、灰汁も抜けるからきれいになる。表皮取りもしやすくなるし、楮もきれいになるんだ。そして、すぐ硬くなるから1日に表皮取りをする分だけ一晩水に浸して、次の日に水から出しながら、乾かないように表皮取りをやるんだ。

楮が良い楮だったら、小包丁を入れて軽く剥ぐときれいに取れるけども、

楮の木に傷があると引っかかってきれいに皮が剥げなかったり、黒い部分を取るのに、楮に傷をつけてはいけないから大変なんだ。小包丁を流れるように入れて黒皮、甘皮を剥がすんだ。力加減を間違えると厚く剥けたり、破れてしまう。

表皮取りは、表皮取り台を作っておく。稲の藁を束ねて、約45度に切った方を前にして、4〜5本くらいを三つ編みにした方を後ろにする。作ったところに座って前の切ったところに楮の黒皮を置くんだ。

⑦干して、ゴミを取る

黒皮、甘皮を取って、大子町の冬の乾燥した寒風に2日くらい晒して干すんだ。そして、そのまま商品として出荷するのではなく裏側まで見て小さなゴミや虫食い、腐った部分は取り除いてから出荷するんだ。そうすると紙漉き屋さんの「塵取り」っていう楮を水に浸けてゴミやホコリを取る作業の負担が軽くなるから。

⑧ 検品から出荷

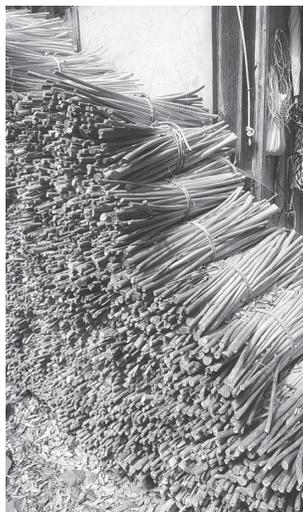
加工が終わったたら、腐ったところはないか、傷ついたりしていないか確認するの。楮の木を100kg伐ってきて、6kgしか製品の分は取れない。私のところで今年1年で加工した製品は全部で約1800kgくらいだよ。

楮の重さは貫目^{かんめ}って単位なんだ。3・75kgが1貫目で、15kgで4貫目。15kgずつ、皮を干したものの長さを揃えて束ねたやつを、機械で丸めて、それで出荷するんだ。

そしたら大子那須楮^{おほこのなすの}ってブランド名が書いた札を貼って、宅急便で紙漉き屋さんに送る。

■ もったいないからね

楮を剥いて残った幹は水分が抜けきるまで干して、畑を耕すときに碎いて畑に撒くと土が柔らかくなり、土の養分が行きわたるようになって楮の成長を少しだけ助けてくれるんだ。楮剥きをして残った幹がもったいないからね。



楮を剥いて残った幹を干す



出荷直前の大子那須楮



楮を砕くチップパーシュレッダー

■ 表皮取り技術者を育てる

私のところに表皮取りを教えてほしい人は1年に1人か2人は来るよ。岐阜の美濃市の方で研修代1日に5000円出してくれるから楮の仕事を始めたいための小包丁とかの道具の代金もすべて、無償になるから助かるの。

教えるには前もって研修に使う楮とか準備しなければならぬ。前日から黒皮を、水に浸しておいてから、表皮取りをやらうの。小包丁の扱いに慣れてもらうのが大変なんだ。

■ 個人で楮に携わることって

自分で楮の栽培、加工、販売をやってみると今の楮の値段が高いとか安いとかわかって、仕事に応じた値段がほしいとか、買う人が納得して買える値段と、楮農家の安定した生活のための値段と合わせてわかるんだ。

もちろん楮の栽培と加工の作業を見てもらうのが、一番値段設定も納得してもらえるんだ。

【聞き書きを終えての感想】



私は聞き書き甲子園に参加することになったとき、不安と緊張でいっぱいでした。しかし、齋藤さんが温かく歓迎していただき、不安と緊張が和らぎました。また、楮畑や道具を見せてもらったときも素人でもわかりやすいように説明してくださったので、安心して取材することができました。取材のときに齋藤さんが「楮の仕事は目立たないけど、和紙として日本各地、世界に行ってるから嬉しいね」「楮がなくなったら紙漉き屋さんが和紙を漉けなくなるから、頑張らないと」とやりがいと使命感を語ってくれたことが印象に残っていて、栽培し、加工している大子那須楮への自信と誇り、そして、和紙職人を尊重していることを改めて感じました。

私は2回の取材と書き起こし、編集を通して、齋藤さんの重みのある言葉と非日常的な体験から、多くの学びと成長がありました。また、聞き書き作品が齋藤さんの人物像だけでなく、楮について知ってもらう1つのきっかけとなってほしいと思います。



profile

齋藤 邦彦

さいとうくにひこ

昭和21年2月22日・74歳

職業：楮の栽培、加工、販売
および大子那須楮保存会会長

【略歴】茨城県大子町生まれ。地元の大子第一高校（現在の大子清流高校）卒業。楮農家の高齢化、問屋からの加工の依頼を受け、楮を多く育て始め、他の楮農家の楮を預かって加工を引き受けた。平成28年11月、大子那須楮がなくなってしまうと危機感を抱き、大子那須楮保存会を立ち上げ、会長として和紙の原料の大子那須楮の栽培、加工技術の継承や和紙産地への安定供給など、多くの課題に取り組んでいる。また、表皮取りなどの作業で、丁寧な作業を心掛け、大子那須楮の品質を良くして、和紙職人の負担を軽減している。

■やりがいある楮の仕事

楮の仕事のやりがいは、人間国宝が私の楮使って紙を漉いてくれたり、東京オリンピックの表彰状やルーブル美術館とか、私の楮が和紙として使ってもらえるのは嬉しいね。うちの楮の量は少ないけど、品質は日本一の自信がある。本美濃紙とかの良い和紙のための楮を頑張って栽培して、加工して使われるってことはやりがいだね。

■楮農家と紙漉き屋さんの安心の暮らしへ

目標は楮農家や加工する人が、絶えずいてくれることかな。あとは楮農家と加工の収入が安定して、紙漉き屋さんとの取引ができて楮農家を続ける人が安心して生活できるような仕組みを作りたいと思ってるよ。そして続けてくれる人が出てきてくれると嬉しいね。

そして知ってもらうこと。京都の迎賓館に大子那須楮が和紙として使われたり有名な画家も和紙として使って、1000万円の絵としても使われたことがわかってもらえれば、やりがいとして楮農家や、加工をする人が出るかもしれない。そして、楮農家も紙漉き屋さんもお互いの状況を見たり、体験しながらお互いを尊重することが大事だと思うんだ。

【取材日】2019年9月12日、11月21日

【参考資料】

『産直コベル』vol.23 特集「伝統工芸とそれを支える一次産業」

株式会社 産直新聞社 2017年発行

「剪定用工具」日本造園組合連合会 <http://www.jic.or.jp>